

2019 年度教育奨励基金「学習・研究奨励金」

ボリビア・ラパスと日本・鶴岡で比較する

ジャガイモなどの在来種継承のあり方

慶應義塾大学 環境情報学部

三年 菅原彩華

## 1, 概要

本研究はジャガイモやキヌアなどの原産地であるアンデス高地を対象とし、在来種やその栽培技術の継承について着目し調査を行うものである。また、調査を行いながら、在来作物が多数存在する山形県鶴岡市との比較を行うものである。現地調査までは文献調査を継続し、3月に現地調査を行う予定である。

## 2, 背景

アンデス高地には原種とされている作物が存在し、ジャガイモはそのうちの一つである(山本 2014)。野生種だった作物は人為的な場所でしか育たない雑草型を経て、栽培種になっている。現在、アンデスには 1500 種ほどの在来種が存在すると言われており、主食でありことから人々の生活になくてはならないものとなっていると考えられる。しかし、アンデスではジャガイモの在来種を栽培する後継者がいない状況だという(高野 2017)。長い年月をかけてその土地にあうように変容してきた在来種の栽培者がいなくなると、その在来種が野生種に戻ってしまう可能性がある。長い年月をかけて変化したものが失われてしまうことになる。また、在来種そのものが持つ、人々の生活との繋がりや文化との繋がりも同時に失われる可能性が考えられる。

山形県鶴岡市は在来作物と呼ばれる在来種が多く確認されている地域である。その地域には山形在来作物研究会という機関があり、在来作物を「①ある地域で世代を超えて栽培されていて、②栽培者自らの手で種とりや繁殖が行われ、③特定の料理や用途に用いられる作物のこと」と定義している(山形在来作物研究会 2010)。鶴岡市は多様な食文化がある事が UNESCO から評価されており、その理由の一つに在来作物の存在が大きく関わっている。鶴岡市の在来種を栽培する農家も減少傾向にあり、栽培者が絶滅しないように高校で栽培する取り組みや市民に在来作物を身近に感じてもらうための取り組みを行っている。

## 3, 研究目的

アンデス高地において栽培されている在来種数や栽培方法、どの程度次世代に継承されているかを明確にし、ボリビア・ラパスと日本・鶴岡などの各地での比較を行うことによって知見を得る事を目的とする。3月の現地調査では、ボリビアのラパス近郊でジャガイモを栽培している 20 代女性やそのほかに参加する人の作業の手元をカメラで撮影しデータとして残す事を目的とする。

## 4, 研究方法

日本では文献調査と遠隔での聞き取り調査、ボリビアではインタビュー調査と行動観察調査を行う事を考えている。インタビュー調査では、ラパス市近郊の農村で農業をしている農家と農業をしていない非農家と分けてインタビューをする予定である。行動観察調査では農作業の手元の様子を動画に撮影し、映像から暗黙知を読み取る。

## 5, 研究成果

文献調査と遠隔での聞き取り調査から得た情報をアンデスと鶴岡で比較した(表 1)。比較したことで、ジャガイモの在来種の多さが目立つ結果となった。栽培方法から、アンデスでは凶作を避けるために様々な場所に植えたり混種して植えたりするが、反対に鶴岡では種を守るために他の品種とは分けて栽培するという違いが見られた。在来種がどのように食されているか、がこのように反映されているのではないかと考えられた。また、位置付けの違いが食文化や市民の中での地名度へと繋がっているという可能性も考えられる。これまで現地の情報を得る方法は 20 代女性への遠隔での聞き取り調査のみだったが、ペルーのリマで農業技術継承の勉強をしている大学生と繋がることが出来た。ペルーのクスコ周辺地域におけるジャガイモのカタログ化についての文献を教えてもらうなど、大きく文献調査への貢献があった。

表 1 アンデスと鶴岡における在来種の現状

	アンデス	鶴岡
品種数	ジャガイモだけで約 1500 種	全てで約 50 種
栽培方法	畝を作らずに品種はランダムに植える	畝を作り品種ごとに植える
栽培される場所	斜面と台地	平地
どんな位置づけか	主食(ジャガイモ)	副食(約 50 種)
何のために?	自分たちが食べるために	
市場に流通	する	ほぼしない(数種類のみ流通)
何を開発したか	ジャガイモの保存方法 (チューニョ)	季節にあった在来種と その保存方法(漬物)
機械化が難しい理由	斜面で高地だから	規模が小さいから

## 6, 今後の予定

3 月の出発までは文献調査を行い、20 代女性と連絡を取りながら現地調査での計画を建てる予定である。現地調査後のトランジットでペルーのリマに日中滞在する予定のため、大学生などに連絡を取り研究に関連する資料などを見る事ができないかを検討している。国際ジャガイモセンターへの訪問も検討している。帰国後には現地調査でのデータから考察をする予定である。

## 7, 参考文献

- (1) 山本紀夫 (2014) 「中央アンデス農耕文化論——とくに高地部を中心として」『国立民族学博物館調査報告』第 117 号、pp.3-18。
- (2) 高野潤 (2015) 『新大陸が生んだ食物—トウモロコシ・ジャガイモ・トウガラシ』中央公論新社(中公文庫)。
- (3) 山形在来作物研究会 (2010) 『おしゃべりな畑—やまがたの在来作物は生きた文化財—〜どこかの畑の片すみでⅡ〜』山形大学出版会